

Title	自主性を重んじる校風の中を徹底的に追究する精神で歩んできた：山本崇史准教授に聞く
Sub Title	
Author	池田, 亜希子(Ikeda, Akiko)
Publisher	慶應義塾大学理工学部
Publication year	2024
Jtitle	新版 窮理図解 No.41 (2024. 10) ,p.4- 5
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	慶應理工の電極のかぐく：電気化学でサステナブル社会を紡ぐ 化学科 山本崇史 (准教授) インタビュー
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO50001002-00000041-0004

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.



自主性を重んじる校風の中を 徹底的に追究する精神で歩んできた

「徹底的に追究して納得しないと前に進まない」と自分のことを話す山本さん。その時々、取り組むべきことに真剣に向き合ってきた。こうして蓄積された知識や経験は、これからの大学での研究や教育で大きな力を発揮することだろう。

——お父様も大学の教員をされていたそうですね。

父は島根大学の教員で、専門は土壤微生物学でした。子供の頃、よく父の研究室に遊びに行っていたので、父と同じ農学部に行きたいと思うようになりました。ところが、農学部を目指して受験した国立大学の入試に失敗してしまい、慶應義塾大学に進学することに。こうして化学の道に進みました。

このことにまつわるエピソードを1つ。慶應義塾大学の入学手続きに向かう新幹線で、付き添いの兄が窓の外を見て「慶應のペンマークだ!」と叫んだのです。私は矢上キャンパスのある校舎につけられているペンマークを落ち込んだ気分で見上げたことを今でも覚えています。

——慶應義塾大学での学生生活はいかがでしたか？

高校までの化学とのギャップに驚きましたね。特に、有機化学は、電子の動きを考えなくては反応が分からないので、勉強しなくては単位を落としてしまうと思いました。それで、金曜日の有機化学の授業(5限の化学D)の後にひょうら(日吉駅を挟んで慶應義塾大学と反対側の商店街のこと)で夕飯を食べて、午後7時頃から約2時間、メディアセンター(日吉キャンパスの図書館)が閉館するまで勉強しました。特にサークルには入りませんでした。慣れない土地での初めての一人暮らしは決して楽ではありませんでした。



——えいながやすあき 栄長泰明教授とは、大学4年生で研究室に所属して以来のご関係だそうですね。

私は栄長研の1期生です。先生がまだ若かったこともあって、研究室ではのびのび過ごさせてもらいましたし、今でもこうして一緒に研究を続けています。でも、栄長先生と私の研究に対する考え方はずいぶん違います。栄長先生はゴールに向かって直線的に進む「エレベータータイプ」。私は、「ここまででは達成できるかな」と一つ一つ確かめながら進む「階段タイプ」です。違いがあるので上手くやってこられたのだと思います。徹底的に追究して、納得しないと前に進まないタイプなので、今、学生たちからは「細かい人だな」と思われていると思います(笑)。

——留学や他大学での研究を経験されていますね。

2007年に憧れのダニエル・タルハム教授がおられたフロリダ大学に留学しました。教授の論文はとにかく緻密で、「こういう研究をしたい」とずっと思っていました。実際、たいへん言葉を大切にされる方で、「きちんと説明するとはどういうことか」を教えられました。

帰国して2008年5月からは、東京工業大学(当時、現：東京科学大学)の彌田智一教授のところへ高分子材料を研究しました。今にして思うと、彌田教授が考える「研究員だったらこのくらい研究しなさい」というレベルに私が達していなかったのかもしれませんが、「研究者として後輩たちの手本になってほしい」と思っていたのかもしれませんが、非常に厳しい方で夢にまで出てきました(笑)。しかし、この時の経験が私という研究者を形作っていることはまちがいありません。華々しい研究成果の裏側では、ものすごい数の非常に地味で泥臭い実験が行われていることも知りました。

——2009年4月に母校である慶應義塾大学に戻ることになりました。

「4月から教員になるわ」と家族に報告したら、父から「研究者である前に教育者だからそれは忘れるなよ」と言われ、ハッとしましたね。これまで朝から夜まで実験・研究することしか考えていなかった自分が、教員になるんだと強く意識しました。





教員として、 学生の質問に有意義な答えを 提供できる存在でありたい

山本崇史 Takashi Yamamoto

専門は有機電気化学、機能物性化学。2002年慶應義塾大学理工学部化学学科卒業。2007年同大学大学院理工学研究科後期博士課程修了。博士（理学）。日本学術振興会特別研究員（PD）、フロリダ大学訪問研究員、東京工業大学資源化学研究所産学官連携研究員を経て、2009年より慶應義塾大学理工学部化学学科助教（有期）、2011年より助教、2014年より専任講師、2023年より現職。2016年と2017年はドイツ・マインツ大学訪問研究員を兼任。

一度離れたせいか、慶應義塾大学は“我が家”のように感じられ、居心地がいいですね。ただ、教員として授業を受け持つなど、これまでとは違ったたいへんさがありました。

常に心がけているのは、「学生の質問にはスパッと答える」ことです。慶應義塾大学の学生は優秀で、私に聞くまでには自分でいろいろ調べています。そして万策尽きて質問してくるので、私は学生が恐れずに前に進めるようなアドバイスやヒントを提供できる存在でありたいと思うのです。そのため日頃から勉強は欠かしていません。慶應義塾の「半学半教」の精神とは、こういうことかなと私なりに解釈しています。

——2016年に研究内容を大きく変えられたそうですが、ずいぶん思い切りましたね。

研究に閉塞感を感じていたので、自分に残された研究者としての時間を考えて、今なら方向転換できるとして研究分野を変えました（研究紹介）。留学先（ヨハネス・ゲーテンベルク大学マインツ）のヴァルトフォーゲル研究室は、当時、優秀な学生がたくさんいましたし、留学生の受け入れ体制も整っていました。私は彼らと切磋琢磨しながら、研究に集中して大きな成果を上げることができました（研究紹介）。

研究には集中力が大事で、長時間研究室にすることが正義ではないと身をもって気づかされました。

——これから慶應義塾大学に進学する高校生や、すでに慶應義塾大学で学んでいる学生さんに、一言お願いします。

研究では、タルハム教授やヴァルトフォーゲル教授の研究室に留学し、分野のトップランナーの研究を経験しましたが、どんな世界でも一流の人間になりたかったら、一流を知らなくて

はなりません。一流のものを食べて、一流のものを見て、一流のものに触れることです。

慶應義塾大学は「独立自尊」など福澤先生の精神を大切にしていることもあり、他の大学に比べても自由な校風だと思います。学生も教員も互いの自主性を重んじています。その分、自分で自分を律しなくてはなりませんが、それでもチャレンジできる雰囲気やそのチャレンジが失敗してもとがめない雰囲気、プロセスを評価してもらえる雰囲気は非常に貴重です。この環境があるから、慶應義塾大学では学生も教員も大きく成長し、花開いているのだと思います。

◎ちょっと一言◎

学生さんから：

● 山本先生はユーモアあふれる方で、学生との会話をいつも楽しんでおられます。私は、ダイヤモンド電極の表面の官能基を変え、電極の性質がどう変わるかといった基礎研究をしています。山本先生は圧倒的な知識量で的確なアドバイスをしてくださいます。先生の口癖は「漫然と実験をするな」。研究は同じ作業の繰り返しが多いですが、「なぜこれをやるのか」を意識しながら取り組むようにしています。また、毎週提出するレポートでは、論理的でない点や、文章としておかしい点などを丁寧に指摘してくださいます。研究者として、先生からたくさんの学びを得ていると感じています（修士1年生）。

（取材・構成 池田亜希子）

さらに詳しい内容は
<https://www.st.keio.ac.jp/education/kyurizukai/>